



地域日本語支援ニュース こだま 第 308 号

2016.11.24



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ともに生きる■

日本語を母語としない生徒たちと高校

東京都立一橋高等学校定時制教員 角田 仁

2■高校進学進路ガイダンス情報(12月)■

=====

1■ともに生きる■

日本語を母語としない生徒たちと高校

東京都立一橋高等学校定時制教員

角田 仁

平成 26 年度の学校基本調査（文科省）によると、公立学校に在籍している外国人児童生徒 73,289 人のうち日本語指導が必要な生徒の数は 29,198 人、その中で高等学校に在籍する生徒数は 2,272 人とされています。それぞれの試練を経て高校進学の時を迎えた生徒たちは、その後の高校生活でも様々な困難に出会います。彼らが直面する「壁」について、外国につながる生徒が多く在籍する定時制高校で長く教鞭をとられている角田仁（つのだひとし）先生にご寄稿いただきました。

◆高校で増えている外国につながる生徒たち

廊下でいつもすれちがう生徒がいる。中国からきた生徒の陳(仮名)さんだ。恥ずかしそうにして通り過ぎていく。給食の時間、入学当初はクラスメイトと一緒に食べていたが、最近は給食にこなくなってしまった。陳さんは都内にある子どもの日本語教室からこの高校に入学してきた。ときどき休むことがあるが、ある日本人の女子生徒と友だちになることができ、なんとか2年目を迎えている。わたしの担当しているクラスでは、フィリピンやタイのお母さんがいる生徒、中国の両親がいる生徒たちなど、二人にひとりが外国につながる生徒たちである。いま都立高校には外国籍の生徒が1,300人も在籍し、その内527人が定時制や通信制に通っている(都教委2015)。ただし、日本籍で海外からきた生徒は含まれていないので、実際には外国つながりの生徒はもっと多い。しかし、高校に入学できた生徒たちにとって壁がいくつもある。

◆高校中退は切実

別の日本語教室からきた山下さん(仮名)は、お母さんがフィリピン人で、お父さんが日本人だ。高校に入る前に日本語を勉強してきたが、高校ではほとんど話さない。クラスでぽつんとしていることが多く、少し派手な服装を着るようになったなあと考えた頃、学校を休みがちになり、家を訪ね保護者と話した。両親ともとても心配しているが、アパートの一部屋での親子3人の暮らしはとても大変に思えた。やがて留年。ある日担任から退学届が出たと会議で報告があった。高校に入っても日本語がわからない、友だちができない生徒たちがいる。アルバイトに追われ、高校を中退してしまう生徒たちを多く見てきた。

◆授業で苦労が絶えない

高校の授業で使用する教科書だけでなく、授業の板書にもほとんどルビは振られていない。学習言語はさらに抽象的になり、日本史や古典の授業などさっぱりわからないという生徒たちの声が聞こえる。残念ながら高校のカリキュラムや授業計画は日本人に合わせたもので、日本語を母語としない生徒たちにとって厚い壁である。都立高校では「取り出し」という同時並行の小人数の授業や外部人材による放課後補習なども制度としてあるが、生徒や保護者、さらに教科担任などが学校長に要請して初めて開講できるもので制度が知られていない現実もある。

◆在留資格により将来の夢が……

生徒と面談をすると美容師になりたい、観光の仕事につきたいなど生徒たちの将来の夢は多彩である。しかしここで在留資格の壁に阻まれる生徒たちもいる。「家族滞在」や「公用」では、就労制限があり短時間アルバイトの仕事にしか就けない。このため進路を進学に切り替えると、授業料など進学費用が必要となり、奨学金を申請するのだが、日本学生支援機構はこの在留資格では貸与できないという。ではどうすればよいのか？ 子どもたちは親を選んで生まれてこない。親の在留資格によって日本で正規の仕事ができない、進学するための奨学金も断られるという日本社会の現状は、政府が批准している「子どもの権利条約」と矛盾しないのだろうか。すべての生徒が希望の進路にチャレンジできるような仕組みが早急に求められている。

◆学校を開き、支援の輪を広げよう

わたしの勤務する都立一橋高校定時制では、「取り出し授業」と課外補習の仕組みを日本語指導の先生方の力で毎年ステップアップしている。さらに、NPOと大学生(留学生)のみなさんの協力で「ONE WORLD」という部活動を始めた。生徒たちは楽しそうに英語や母語を使い、放課後に活動している。生徒たちが持っている力を、この日本そして母国で将来開花できればと思う。そのためにもこのような生徒たちが通っている定時制高校の取り組みを日本社会が大切にして欲しい。
